

平成 26 年度末に派遣を修了した大学院派遣教員に係る実践研究報告書

高知県教育委員会事務局 人権教育課
指導主事 宮田 一仁

1 大学院での研究の内容と成果

大学院の研究では、「交流分析の理論に沿って、オーバーラップ・エゴグラムを用い、教師と子どもとの関係性について客観的に把握し、それに基づいたコンサルテーションを行えば、教師は関係性への理解を深め、かかわり方を改善し、子どもとの関係性がより円滑になるのではないか」という仮説を設定し、教師と児童との関係性の変容を検証した。検証では、3組の教諭と児童を対象に、「交流記録表による交流方法の変容」「オーバーラップ・エゴグラムの事前・事後の変容」「コンサルテーション中に研究協力教諭が対象児童について語る内容の変容」の三側面から分析を行ない、検証した結果、以下の知見が得られた。

- ① 交流記録表では、3名の研究協力教諭のうち、2名が改善を試みた自我状態の交流割合が増加した
- ② コンサルテーション実施後のエゴグラムは、改善を試みた自我状態が3名の研究協力教師とも上昇した
- ③ コンサルテーション実施後のオーバーラップ・エゴグラムは、研究協力教諭と対象児童との自我状態の重なりが増え、交流の接点が増えた
- ④ 研究協力教諭の対象児童に対する印象が肯定的に変容した

これらの点を勘案すると、本研究の仮説は概ね実証された。研究協力教諭の語りの推移を見ると、3名の研究協力教諭共に、研究開始前に比べ対象児童に対し、新たな印象を持っていた。このことは、オーバーラップ・エゴグラムを用いた支援を実施すれば、対象児童との間で新たな関係性を生み出す効果がある可能性を示唆しており、学校現場で用いる上での利便性の高さを示したと考える。

今後、対象数を増やし、更に検証を重ね、般化していくべきものだと考える。

2 大学院での研修と研究の成果を踏まえた平成 27 年度の実践

本年度、指導主事として、高知県教育委員会事務局人権教育課に配属され、スクールカウンセラー等活用事業の担当となった。臨床心理士養成コースを修了した経験をいかし、本県におけるスクールカウンセラーの効果的な活用やスクールカウンセラーの資質の向上に努めてきた。また、昨年度の研究成果をいかし、研修講師として般化に努めた。以下に主たる取組を挙げる。

(1) 本県におけるスクールカウンセラーの効果的な活用促進について

現在、スクールカウンセラーは、学校において広く認知されてきたが、学校組織の一員として機能しているかと言えば、配置校によって差があることが実情である。そこには、教育の専門家としての教員と心理臨床の専門家としてのスクールカウンセラーとの職分が曖昧になっている点が要因と考えた。そこで、スクールカウンセラー、配置校コーディネーター、市町村（学校組合）教育委員会の担当者が集まるスクールカウンセラー等連絡協議会のテーマとして、「スクールカウンセラーと学校のよりよい協働」を掲げ、講演及び研究協議を設定した。講演では、チームでの児童・生徒の支援を想定し、スクールカウンセラー、教師それぞれの役割について、そして研究協議で

は、お互いに発表する事で、それぞれがその内容を知り、可能な方策を各校に持ち帰り、協働する事ができるように協議内容を設定した。

(2) 本県におけるスクールカウンセラーの資質向上について

現在、スクールカウンセラーに求められる役割は、発達に課題のある子どもたちや、虐待・いじめを受けている子どもたちへの支援にかかわる相談等、課題が多様化、複雑化してきた。それに伴い、課題解決が難しいケースも増えてきており、現状の体制では十分な対応ができない場面も少なくない。このような状況から、個々の力ではなく、チーム力で解決できるような体制作りが必要であり、多様化・複雑化した課題に対し、スクールカウンセラー、教師がそれぞれの専門性を活かし、チームとして協働することが求められていると考える。

そこで、スクールカウンセラーだけではなく、スクールソーシャルワーカー、教師など、教育にかかわる様々な専門性を持った幅広い層が参加する事ができるスクールカウンセラー等研修講座を実施した。その講座では、トラウマ、ピア・サポート、心理教育など、現在、子ども達や学校が抱える様々な課題や、その課題に対する支援に焦点を当て、それぞれの立場の方が、同じ場で同じ内容を一緒に学び、そして学んだ事を学校や子どもに対し、一緒に還元していく事をねらいとして研修内容を企画・実施した。

(3) 昨年度の研究成果の般化について

昨年度の研究成果を基に、教育関係者に対し、「子どもがエンパワメントするために」というテーマにて講演を行った。相手との関係の改善を図るには、両者の関係性に着目する必要があるが、相手、もしくは自分のみに視点を置いた行動を起こすため関係性がうまくいかない事が多い。近藤(1994)は、教師の児童・生徒へのかかわり方について教師が教師特有の価値観を基にして子どもに求める要請行動と、その要請行動に適合しない価値観を培ってきた子どもが取る行動様式との不適合を指摘し、両者をマッチングすることの有用性、必要性を主張している。この点について、エンパワメントの視点は非常に重要であると考え。エンパワメントについて、森田(1998)は、「人と人との関係の在り方であり、お互いがそれぞれ内に持つ力をいかに発揮しうるかという関係」と説明している。

そこで、講演の中で、実際に自分のエゴグラムを作成してもらい、自分自身の良さを知ってもらおうと共に、同じ参加者のエゴグラムと比較して、相手にも相手の良さがあることを理解してもらおうようにした。そして、その上で自分の良さと相手の良さを尊重し、関係性を考えるような内容を企画・実施した。

3 成果と課題

今年度は、スクールカウンセラー等活用事業の担当であったため、実際、スクールカウンセラーは学校現場でどんな困り感があるのか、そして、その困り感を改善するには、どのようなことが必要なのかといった視点の基、昨年度、大学院で学んだことをいかし、連絡協議会や研修講座を企画・実践することができた。しかし、一方で大学院での研究内容を般化する機会を多く持てなかったことは今後の課題である。可能な限り、研究成果について紹介する機会を多く持ち、般化に努めたい。

引用・参考文献

近藤邦夫(1994). 教師と子どもの関係づくり——学校の臨床心理学. 東京大学出版社, p. 49.

森田ゆり(1998). エンパワメントと人権——こころの力のみなもとへ. 解放出版社, p. 14.